

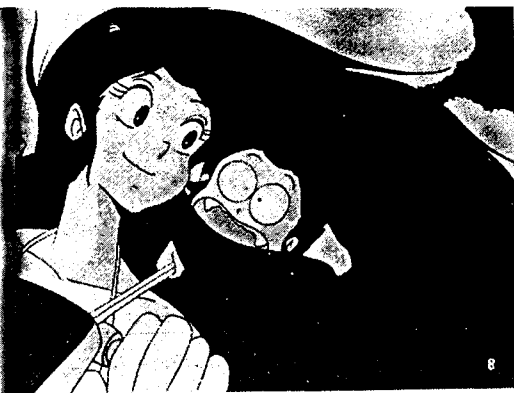
F I L M ■ 押井守監督「うる星やつら2・ビューティフル・ドリーマー」

若手アニメーション演出家の才気がみなぎる小品である。

藤田真男

押井守、三十二歳。テレビと劇場用の「うる星やつら」シリーズを手がけている、おそらく若手（この世界ではすでに中堅か？）の中では最も才能あるアニメーション演出家の一人だろう。

アニメ・ブームのおかげでミンもクソも一緒にされて、たかがアニメ、所詮マンガといった愚かな偏見は相変わらず残っているようだ。また、商業ベースに乗った集



団作業によるアニメーションを「作家」不在のレベルの低いものと見る半可通もいるようだ。そういう連中に対し、宮崎駿（彼の監督作「ルパン三世・カリオストロの城」は「娯楽映画」にして初の大懸賞受賞作となった）はこう言っている。

「そういう人には言わせておけばいいんで……。いわゆるアニメーション作家と言われる人達の作品というのは一種の俳句のようなもので、ある種の思いつきをよくまあこれだけの時間をかけて作ったなあと思嘆するところもあるんだけど、でもそうじゃなくて、大勢で積み重ねて作っていかなくちや出来ない世界もあるんじゃないかって（アニメージュ文庫「また会えたね」より）」

というわけで、ゴタゴタ言う連中など初めから度外視して、その才能をのびのびと伸ばしつつあるのが押井守であり、脚本も兼ねた今回の「うる星やつら2」は前作

の併映であった「シンベン・ライダー」に劣らぬほどの怪作に仕上がっており、こんなこと続けていてキティ・フィルムは大丈夫なのだろうか、とにかくエライといえようがない。

前作は女性ライターによるオリジナル脚本で、SFロマンチック・コメディの枠をふまえ、「卒業」のパロディもとり入れた明るく楽しい漫画映画になっていたが、その後もテレビシリーズにおける原作離れは著しく、いまや高橋留美子を超えて倉多江美の世界へと突入しつつある。唐突にムジール、クラック、キューブリック、ゴダールの名や作品が目にも止まらぬ速さで引用されるぐらいいは序の口で「ラムちゃん」の理由なき反抗」の巻では「灰とダイヤモンド」を見事なカラー画面で再現。押井守という人は大変映画好きで、今回の長編第二作も最初は「映画作り」の話にしかかったそうだ。テレビでいろいろな映画を引用して

遊んでいても、映画を撮れないヒガミなどみじんも見られないところが気持ちいい。

今回の作品はテレビの「みじめ！ 愛とさすらいの母!?」の巻でも描かれた、超現実的な夢の世界を拡大したものらしく、閉ざされた小宇宙（何と巨大な亀の背中に乗っている）を出現させ、孤立した焼跡のような街で「ゴジラ」（画面に雨が降っている）を見てヒマをつぶすという楽しい破壊願望を描くかと思えば、さすが戦後派、治に居て乱を忘れず（？）、二転三転、逆ユートピアからの脱出なるか!?——と、めくるめく展開。映画が終われば夢から覚めたような気分である。

仕上げの荒さも少し目につくし、アニメーションの密度は決して高いとは言えないが、それらを補って余りあるほどの若々しい才気がみなぎる小品である。

F I L M ■ 大森一樹監督「すかんぴんウォーク」

ここにるのは大森流の「悔いある青春」へのささやかな祝盃だ。

黒沢哲哉

主人公の少年が晴海の岸壁に泳ぎ着く開巻から「すかんぴんウォーク」はすでに一種の寓話としてはじまる。それをうけて、以後の展開の随所には奇妙な個性によって演じられた、変なシーン。がはさみ込まれてゆく。メルビルの「サムライ」に心酔し、酒を飲んでハードボイルドを自演している監



督すれの大工・平田満、「スターダスト」というもつとらしい名の30年代アメリカ風安ホテルの主人・田中邦衛、白いスーツに赤いバラの似合うヨットハーバーの管理人・大戸錠など、彼らはそれぞれに自己の世界の主役であり、皆それぞれの青春の傷を心に秘めた者たちである。そう考えてみれば、この映画に登場する人物たちは誰もがかつて栄光を夢見、敗れ、しかし未だにその過去を背負い続けている者ばかりであることに気がつく。テニスプレーヤーだった喫茶店のマスター然り、元バレリーナの太めのウエイトレス然り、アイドルタレントからポルノに転向した女優然りだ。

ここで思い至るのは、この作品を大森映画の系譜の中にとらえた場合に真の主役として浮き上がってくるのが、最終的にその輝ける未来が暗示されるヒロー・吉川晃司ではなく、挫折の末に開き直る歌手志望の先輩・山田辰夫の方

だったのではないかということだ。かつて「オレンジロード急行」において描かれた、終わり方を知らないままに青春の夢をひきずって生きている者たちの姿は、それ以前、以後の大森作品の中にくり返し登場してきたものであり、この山田辰夫演じる男の姿の中にも、「暗くなるまで待てない!!」の監督志望の青年や「オレンジロード急行」の海賊放送局の若者たちと同質の蹉跎、哀しみを読み取ることができるのである。

「オレンジロード急行」の若者たちが、その断ち切れぬ夢のために警察から追われるハメとなって最後には海に出て本当の海賊（！）になるしかなかったように、この映画で山田の演じる青年も、才能の限界を誰よりも自覚しつつ、増場の聞き直りからやつとのこと得た芸能界の片隅の位置にすがりついてその役割を必死に演じながら、心の奥に人知れぬ痛みと捨てられぬ夢の残骸を持ち続けている

くしかなかったのである。それは同時にここに登場する夢に凭れて生きる大人たちの代弁者としてもあったと言える。

しかしこの大森流の「悔いのある青春」は実は自分にとっては何ものにも代えがたい勲章であり、終盤近く、吉川と山田が、かつてお互いにスターを夢見て貧しい祝盃をあげた公園で、それぞれの立場で再会する気まずさと友情の交錯した場面が、思い入れたっぷりに、あえてロングショットの突き放した画面の中で、はにかむようにはぐらかされてしまうのも、演劇を志しつつロック歌手としてデビューした吉川と、演歌歌手、ポップス歌手に挫折し、「ロック・トール」なる芸能人の悲劇をまくしたてることによつてかろうじて芸能界の「ザル」に引っかけた山田の、それぞれの勲章に対するひそやかな祝盃だったのである。

押井 守インタビュー——藤田真男

今はアニメーションに踏みとどまって一本でも多く作りたい。
アルドリッチの生き方が僕のひとつの理想なんですね。

押井守（おしい・まもる） 昭和26年8月8日、東京生まれ。東京学芸大学美術教育学科卒。在学中、自費で16ミリ映画を製作。卒業後、映画会社に入ろうにもどこも採用していなかったでラジオの深夜放送のディレクターに。1年足らずで辞めてアルバイト。国分寺駅前に竜の子プロ（アニメーション製作）があったので、入れて下さいといったら入れてくれた。そこで「発賣太くん」「ヤッターマン」「ゼンダマン」を演出。2年後、スタジオぴえろへ移り「ニルスのふしぎな旅」（TVと未公開の劇場用長編アニメーション）を演出。現在は「うる星やつら」のチーフ・ディレクターとしてTVシリーズ全体をチェックし、同時に何本かの脚本・演出も担当。他に「うる星やつら」劇場用長編2本とSFアニメ「ダロス」（オリジナルのビデオソフト）も演出している。

る。

学生時代から現在まで、押井さんの行動範囲は中央線の国分寺近辺からはとどろいていない。元米、そういうタイプの人のなだらかな。アニメーションの仕事は計算がすべたので、机から離れることがない。実写の監督が半ば行き当たりばったりのハードボイルドの探偵だとすれば、アニメーションの監督は現場へ行かずベッドの上で真相を追ってゆく探偵に似ている。

——学芸大に入ったのは？

「授業料が安かったから。月1000円でした。しかも奨学金、授業料免除という制度があって、安から居つちやう。『学大食』という言葉があった。僕は出るのに6年かかりました（笑）」

——じゃ、絵は？

「全然描けなかった。アニメーションの絵コンテ描くのには苦労しま



「うる星やつら2」

たんですけど、カメラを買ったらフィルム買うお金もなくて、またアルバイトして」

「ちなみにその映画のタイトルは？」

「いやア、覚えてるけど思い出したくもない（笑）。一応、劇場映画で、3本作って未完成が1本。卒業制作で作ったのはクリス・マルケルの「ラ・ジュテ」のスタイルで、スチル・ショットだけの映画方法が分かんなくていろいろ試してみても——今思うと我ながら画期的だったという気がしないでもないんだけど——まず普通に写真を撮ってね、リスフィルム（密着用の透明印画紙）に焼きつけて、それをスリガラスと透明なガラスの間に挟んで裏から照明を当てて撮影する。光がにじみこんだような感じがはしかつた。あとから、そういうテクニクがアニメーションにあることを知ったんですけど

どね。ええ、当時の貧乏学生にとっては相当な出費でしたね。音楽だけでナレーションもなし。人に見せたら何が何だか分からん、と（笑）」

——映画を沢山見始めたのは？
「本格的には大学に入ってからですね。多い時で年間1000本ぐらい。『ぴあ』もなくて新聞と見て、スケッチブックにスケッチし表現作って。あまり遠征はしない

んですけど国分寺にぐる映画はほとんど見たし、自主上映も盛んだったし、無差別に見てた。

幼稚園の頃は太森に住んで映画館が8軒あった。プログラム・ピクチャーの黄金時代で、オヤジがすごく映画好きで、ほとんど毎日、家族の誰かにつれてかれて、子供の頃に見た映画の数は分らないですね。生まれて初めて見た映画も覚えてますね。『宇宙水爆

戦』というSFで、幼稚園に入る前の年。

今は映画見るとマなんてなくて、それが最大の悩みですね。せつせとビデオでは見えますけど、やっぱり映画館へ足を運ばないと映画見たという気にならない。つまらないですね。見たくても見逃した痛恨の映画が何本かありまして、去年でいえば『隣の女』ですね。電車が遅れてあきらめたんです、途中から見るのは嫌いだから」

——何回もくり返し見た映画は？

「やっぱり『ラ・ジュテ』なのは、16ミリのレンタル・フィルムを借りてきて見ましたからね。作家的な興味というのは、クリス・マルケルに関してはあまりないですね。ただ『ラ・ジュテ』に関しては、何か啓示的な体験があったと思うから」

「うる星やつら2」を見るとP・K・ディックのSF小説「ユービック」なども連想させられるが、『ラ・ジュテ』と聞いて納得。

——それじゃ、好きな作家は？

「学生時代はポランド映画が好きで、やっぱりワイダかな。最後に見たワイダの作品は自主上映でやった『白樺の林』という、ワイ

ダの初めてのカラーで、これは感動しましたね」

——TVの「うる星やつら」の映画作りの話で「灰とダイヤモンド」を再現したシーンはビデオを参考にしている？

「いや、全然見ないで、全部記憶です。そういうこと、わりと記憶してるんです」

——映画の「うる星やつら2」も初めは映画作りの話にしたかったとか？

「ええ、去年の夏にやるはずで、伊藤（和典）君と相談して初稿まで書いてもらってたんですけど、原作者のほうからクレームがついて結局、実現しなかったんです。『アメリカの夜』みたいなのをやってみたかったんですけどね、大仕掛けに……」

押井さんの机の前に、何か叫んでいる。メガネのセルが貼ってある。メガネは、映画とメカにうるさい一見コメディ・リリフ的なキャラクター。タダで本物の戦争が見られると喜んでたり、焼跡のような廃墟で「ゴジラ」を見て楽しむといった場違いともいえる発想は、このメガネのものである。突然、ムツカシイことを口



走ったりもする。「うる星やつら」の中で一番フツウなのか、それとも一番いいかげんなのかよく分からない、実に味わい深い名脇役である。

——メガネには押井さん自身、親近感ありますか？

「そうですね。僕が高校生や大学生だった頃の気分——例えば映画を作るといふような、ひとつのことをめぐるってカンカンガクガクやるような気分を、忘れられないところがあるんですね。アニメーションというものの結局、実写と同じなんです。自分の一番よく知ってる世界が一番よく描けるという意味でいえば」

「風の谷のナウシカ ガイドブック」でも押井さんが語っていることなので重複はさけるが、これは70年代初めに学生だった世代の気分ともいえる。僕と押井さんは同世代なのでよく分かるのだが、この気分を他の世代に伝えることは不可能に思えて、饒舌と断念の間で宙に迷う。

——こないだ、押井さんと同じ年の監督で池田敏春という……ご存知ですか？

「ええ、知ってます」

——その池田さんに会って、やつと僕と同世代の監督が出てきたなアと思ったんですね。池田さんがいうには「人魚伝説」を若い女の子たちが見れば笑うだろうと思っただけで、笑う奴がマチガイで、俺が正しいんだ」という気分で作ってる。

「やっぱり自分の世代的な確信みたいなものがあるわけで、それは何といわれようと変えられないと思うんです。メガネというキャラクターでもね、ギャグメーカーと思われているかもしれないけど、あれは僕はわりと本気なんです。ね。」

こういうことがいいか悪いかわかんないけど、世代的な確信を核にしてしかモノを作れないということがひとつ。それと今の若い人たちはどうなんだろう、ということも考えないわけにはいかないです。僕らの仕事では言葉が通じるのか通じないのか、いつも考えるんですけど、僕はそういうことではわりと楽観的というか、本質的には変わらないんだという気が、多少あるんです。うる星でも最初、高校生というのはいくらなんじゃないといわれたんですけど

ど、本当の高校生の生活というのはどうしようもなく、いいかげんて(笑)、そのいいかげんさが出れば、それは今も変わらないんじゃないかなと」

——実写をやってみたいとは？

「チャンスがあればやってみたいとは思いますが……。僕の後輩がこないだ、につかつの監督になったんですよ、金子修介という——彼の話聞くで大変みたいね。僕らの仕事って1年中机に向かっているでしょ。だから時々、外へ出て発散したいというのはある。お祭り騒ぎでワーツとやっちゃうというの、アニメーションの場合あり得ないですからね。計算が絶対になりますから、気分をやって、たまにたまくなっちゃうことはない。でも映画の魅力って本当はそういうところにあると思うんですよ。たまたま傑作になっちゃうとか。『第三の男』なんて、もしかししたらあの監督は何も考えてなかったんじゃないかって(笑)。

あと、『第三の男』でも『灰とダイヤモンド』でも、あの終戦直後の街を作りようがないですよ。それはめぐり合わせてしかない。映画というのは時代の子というか

現実の子というか——アニメーションもそうなんだと最近思うようになってきましたね。必ずしも作られただけの世界じゃない。よく、アニメならではの」とかいわれるでしょ。それは、かなり違うんじゃないかと思うんですね。うる星』のあたる(主人公)たちが映画を作るといふ話が、なぜなくなったかという、アニメじゃなくともできるっていうんですよ(笑)。アニメらしさがどこにもない。僕はそう思わないです。分かつてもえなかつたです。ね。

僕の場合、たまたまアニメーションが一番フィットしていると思うし、他に知らないけど、実写も同じだと思ってる。だから今はできるだけアニメーションに踏みとどまって、1本でも多く作りたい。アルドリッチの生き方が、僕のひとつの理想なんです。アルドリッチの昔では『飛べフエニクス』後期では『北国の帝王』が一番好きです。40代は40代、50代は50代、60代は60代と、その時に見合った映画があり得るはずなんです。僕もできるだけ長生きしたいです(笑)。

TOPICS ■発見された幻のフィルム『桃太郎・海の神兵』

瀬尾光世氏が作った呪われたフィルム『海の神兵』は、四〇年の歳月を経て、その作者とともに今最も輝いている……岡島尚志

遂に「桃太郎・海の神兵」が上映された。四月七日、フィルムセンターでのその上映は昭和二〇年、戦火の下での初公開から実に三九年ぶりのものである。アニメ・ファンにとってまさに「幻の傑作」として待望久しかったこの作品は、予想通り高い人気を得た。このアニメには数多くの「日本初」があるが、その内の一つは「日本初の長篇アニメ」ということである。街の映画館には「少年ケニヤ」「風の谷のナウシカ」等々長篇アニメが溢れ、日本映画はアニメに席捲されたかの印象を与えかねない昨今だが、そこに突然、そのルーツが登場したのだから、面白いような皮肉のような不思議な感じである。『海の神兵』の上映が、いかに待ち望まれていたかについては、三月二六日付夕刊の朝日新聞に小野耕世氏が記した熱烈な記事を読めば明らかであろう。

この美しい一文は、NHKの報道(三月三十一日朝のヘニュースセンター)につながり、数え切れない程の日本人の目に触れたはずである。番組の中で手塚治虫氏が見せた熱っぽさもまた異常であった。氏は約四〇年前に見たこの作品の劇中音楽を唄い始めた程である。報道の反響は大きく、NHKにもフィルムセンターにも問い合わせが殺到した。中にはこの作品の物語の下敷になったとされる「メナド降下作戦(昭和一七年一月一日)」の関係者からの電話まであった。

この映画については小野氏が幾つかの優れた文章を書いておられるので、そちらを十分読んでいただきたいが、ここでは上映に到る経緯と、瀬尾光世(太郎)監督にお会いして明らかになった事実を内容の紹介とともに記しておきたい。『海の神兵』のネガは松竹大船



の倉庫で発見された。これだけが発見されたという訳ではなくて、数十本の劇映画の中にまじってある。フィルムセンターではこの内現在までに、渋谷実の「四人目の淑女」(昭和三年)、今井正の「由起子」(昭和三〇年)、などのプリントを焼きつつある。『海の神

兵』は題名からも明らかなようにに戦意昂揚の国策戦争アニメで、終戦のどさくさに松竹自身の手で焼却されたとされていたから、アニメ研究家諸氏の驚きは大変なものであった。一番驚かれたのは瀬尾監督御自身で、上映に先立って新しく焼かれたプリントに目を通して下さった氏は、「感無量です、言葉もありません」と何度も繰り返しておられた。九巻・七四分の白黒世界はまばゆいばかりに美しく、戦前の日本が如何に高いアニメーション技術を持っていたかに、改めてびつくりさせられる。プリントは一月の終わり頃に現像所から上ってきたが、見てそれが九巻だと分った時は本当に嬉しかった。長年の作品には六巻説、九巻説があったからだ。前半の二巻は国内篇(故郷篇)、後半の七巻は国外篇(南方篇)である。六巻説の根拠は明らかでないが、短く切って